郡市医師会だより

渡島医師会　がん予防市民フォーラム

がんの予防はどこまで可能か

― ピロリ菌退治で胃がんは防げる？！ ―

渡島医師会　会長　小笠原　実

幼年期の５歳頃までに経口感染したピロリ菌が胃の中に住み続けると、慢性胃炎が進行し胃・十二指腸潰瘍や胃がんが発生しやすい下地がつくられることが分かってきた。

さらに北海道大学の浅香正博特任教授らの研究では、ピロリ菌除菌は、特に30歳代までに除菌すると非常に効果があり、99％は一生胃がんにかからないとされている。

実際に若年者のピロリ菌検診を実施してみると、検診受診率は中学生が最も高く、進学や就職で親元を離れる前に除菌を終えることも可能であることが分かったので、渡島医師会では子どもたちが将来胃がんにならないことを目的として今年度から渡島管内（１市９町）の中学生を対象に「**ピロリ菌の学校検診**」の事業をスタートした。

こうした医師会活動を広く市民に知ってもらうとともに、胃がんとピロリ菌についてももっと理解を深めてもらうために、がん予防市民フォーラムを平成26年８月30日に北斗市総合文化センター「かなでーる」で開催し、市民らで会場は満員（300席）となった。参加者全員にアンケートを行ったところ、７割以上が60～70代だが、40代以下も１割弱参加していた。菌の名前やピロリ菌が胃がんの原因となる事は８～９割の方々が知っていたが、ピロリ菌検査は約８割の方が受けたことがないと答え、当日同時に行った50人限定のピロリ菌無料検査は受付開始から程なく定員オーバーとなりピロリ菌検診への関心の高さがうかがわれた。

講演会の前半は、浅香教授と共にピロリ菌研究の第一線で活躍されている北海道大学の加藤元嗣教授の「これからの胃がん予防対策－胃がん死ゼロを目指して－」という特別講演で（**写真１**）、後半は当会の丸山裕常任理事の司会で「地域におけるがん検診と問題点について」をテーマに３人の講師によるパネルディスカッションが行われた（**写真２**）。北斗市保健師の松本教恵係長が道南のがん検診の実情（受診率の低さなど）を統計など交えながら詳しく説明し、次に市立函館病院の木村純院長が胃がんの治療最前線と題して、検診で見つかったがんは早期がんの例が多く、内視鏡手術で行われるため回復も早く治療成績も良いことを強調された。最後に、当会の光銭健三副会長が「若年者におけるピロリ菌検診の意義と渡島医師会の取り組み」を説明した。福島・知内・木古内の３町の中学生の検診受診率はいずれも80％以上と高く、陽性の生徒のほとんどの保護者は除菌を希望し、大きな副作用も無く実施できたと報告した。

会場からの質問は予想以上に多く、ピロリ菌検査を受けたいがどこの病院でもできるか、費用はいくらかかるか、除菌は何回までできるか、除菌に成功したが再感染はあるのかなど検診・除菌に関するものから、毎年胃バリウム検査を受けているが今日の話を聞くとバリウム検査は意味がないのかという胃がん検診の在り方を問うものや、がん検診率をアップするにはどのような対策が必要と思われますか？がん患者による啓発活動についてどう思いますか？という30代女性の専門的なものまであった。

講演会全体の進行は当会の宮村拓郎副会長が務め、時に会場に笑いを誘いながら有意義な２時間半のフォーラムを取り仕切ってくれて無事終えることができ、今後の中学生の「**ピロリ菌の学校検診**」に対する当会の活動に大きな弾みがつくものと期待している。

写真１　北海道大学教授 加藤元嗣先生

写真２　パネルディスカッション